

川のある町

西澤 いその

新幹線の下りホームに、ヒールの爪先が触れた瞬間、遙は頭の先に稻光が突き抜けるような痺れを感じた。

「帰つて来たんだなあ」

およそ一年振りの帰郷だつた。胸の奥で、自分の声がころころ転げて、繰り返し聞こえる。「ああ、」とため息ともつかない声がそれに重なつた。反射的に視線が、駅舎のガラスの向こうに走つた。斜め前方に山の稜線が見える。弥彦山だ。昔とちつとも変わらない弥彦山。帰省するたびに、その山を目にすると、親の懷に抱かれるような安心感が体を包む。懐かしさが沸き上がつて止まらないのだった。

その稜線の奥が、夕映えの名残りのように、ぼんやりした朱色に染まつていた。黒い山影を目に残しながら、遙は下りエスカレーターに乗つた。そしてタクシーに乘るか、徒歩で実家に向かおうか思案した。歩くには少し遠い距離がある。駅舎から外に出ると、この地方特有の季節風が遙の体を絞めつけてきた。遙は思わず、ぶるつ、と身を震わせ

「おーさぶ」

久しく使つたことがなかつた田舎訛りが出た。だが、寒さの度合いは、昔の方が、もつと厳しかつたと思う。

タクシーの運転手が、客待ち顔でその場に佇んでいる遙を、目線で車中へと、自動ドアを開けた。遙は、余りに冷たい風に怖気づいて、機械仕掛けの人形のように、タクシーに乗り込んだ。

「どちらへ」

遙はシートの奥へ腰をずらせながら、行き先を告げた。

「東京かららかのー？」

運転手は新潟弁特有の抑揚をつけて、声をかけた。

「えーまあ」

厳密に言えば東京ではないが、言い直すのも億劫だつた。

「やつぱり、こちらは寒いですね」

東京からかと言われた手前、標準語で答えなければならないような暗示にかかつて、言葉が固まつた。

「だろも、まだあ、暖つたけえ方だこてね。雪

も降らんしのー」

運転手は前方の車の流れに注意を払いながら答えた。丁度、信濃川に架かる橋へ曲がる車線に入った。遙の実家はこの橋を渡り切つて産業道路を東に向かつて走り、十四、五分の距離にある。昔は農道だつたが、車で走ると土埃がもうもうと立つた道である。が、今は何倍も広くなり、立派に舗装されて町の幹線道路に変わつていて。遙は窓外を眺めながら、すつかり家並に変わつてしまつた風景に、目を閉じた。

果てしなく黄金色に広がる秋の風景がよみがえり、稻穂の匂いまでも、鼻孔を膨らませるようを感じた。

新興住宅地に変わつてしまつた何の変哲もない町並みに、感慨も沸いてこないし、愛着

も持てない。ただ同じこのあたりの畦道を、稻束を担いで、よたよた歩いている七、八歳の頃の自分の姿を思い出して苦笑が漏れた。農繁期には猫の手も借りたい忙しさで、否応なしに農作業を手伝わされたものだつた。そこで遙は実家への道にさしかかったのに気づいて

「そこを右へ行つて下さい」

と運転手に告げた。村へ入る西側の道だつた。帰郷する度に、そのあたりが様変わりしているのを、承知していたが、全く変わり果ててている。

昔は、お化けが出ると騒がれた場所で、様々な木々が、鬱蒼と茂つて、風が出ると不気味な唸りをあげた。通称、森下と呼ばれていた。あの頃の森を想像しながら、急に遙は

「ここで、下してください」

と言つた。ちよつと、不気味な気もしたが、もう子供ではない。少し歩くと森のあつた奥には、村ではかなり、大作の農家の屋敷があつた。

門口の左側に築山があつて、白木蓮の大木が聳えていた。五月になると、見事にひらく白い花びらに、口をあんぐり開けて、見とれていたことがあつた。

こここの奥様は色の白い上品な顔立ちの人だつた。赤銅色の腕をむき出しに、働き詰めだつた自分の母と比べながら、遙は胸が熱くなつた。その人もとうに亡くなり、今は跡を継ぐ人も、嫁も貰わず、ひつそり静まり返つてゐる。その前を通り過ぎ、道の交差する場所を突つ切ると、遙の親戚の屋敷があつた。兄の話では、つい先日、後継ぎが亡くなつて、老夫婦二人になつてしまつたらしい。この家もこそつと静まり返つてゐる。昔、村は三軒の戸数があつたが、今現在専業農家はほとんどないに等しい。後継者がいない、村の西側は、活気が感じられなかつた。

すっかり寂れてしまつた村を、遙は暗い気持ちで歩いた。こつこつと自分の足音だけがついてくる。やがて村を西と東に分ける川の袂に差し掛かつた。足がその手前で自然にぴたりと止まつた。

何の変哲もないコンクリートの橋がかかつてゐる。遙はその橋を渡るのが躊躇われた。暫くそこに佇んで川面の黒々とした流れに、目を凝らした。浮かんだり、沈んだりする弟の形相が、ちかちかした。胸奥からせり上がつてくる熱いものが、

「たけー！」

と叫んでいた。声となつてはきだされてはいなかつた。

あの日、前日の雨で、川が増水し、泥水のように濁つた流れが暴れていた。遙の隣に並んでいた弟の竹秋が、突然、橋の上から消えた。

そつくり返つて頭から川に落ちたのだ。一瞬のことで、何がなんだか分からず、声も出なかつた。何人か一緒に並んで欄干に腰かけていた村の子供が、竹秋が、竹秋が、と大声で叫んだ。落ちたてーと金切声で叫んだ。丁度、そこへ通りかかつた青年が、子供たちの異常な叫び声を聴きつけて、浮かんだり、沈んだりして流されていく竹秋めがけて飛び込んだ。

遙はその後のことは記憶になかつた。青年が竹秋を抱きかかえて、必死に足る後ろ姿は、はつきり目に焼き付いてゐる。ただその後、竹秋が寝たきりになつたのはどうしてだつたのか分からぬ。もともと竹秋は、先天性の白内障で視力が弱かつた。けれども全然

見えないわけではなかつたのだ。生後一年位の時に手術をうけていて、学校に上がる前にもう一度手術をうけなければならないという話だつた。

川に落ちた八月の終わり頃から、蚊帳の中で臥せつてゐる竹秋を、歎医者だと陰口を叩かれていた、目のギヨロリとした町医者が、往診に訪れるようになつた。竹秋は蚊帳の中で臥せつたまま、だんだん尿が出なくなつていつた。

遙は、はるやーぽんぽん、はるやーぽんぽんと、歌うように、後ろについてくる竹秋が、今も傍にいるような気がして、お前が生きていればなーと、胸が熱くなつた。いつもぶかぶかの長靴を履いて、遙の後を追いかける頭でつかちの弟だつたと、生きていれば、とうに還暦も過ぎた年になつてゐるはずなのに、亡くなつた時の三歳のままの顔が浮かんでも來るのだつた。

「お前が生きていれば、兄姉が年老いて、何時どうなるかと心配しても、お前がいれば、まだ心強いけど、自分一人残されるのかと思うと、寂しくて、寂しくて堪らないんだよー」

と見えない相手に向かつて一人ごちた。実際今回の帰郷も、介護施設に入居している姉の見舞いと、実家を継いでいる兄が、経営していたスーパーを倒産させて、精神的に不安定なことも心配だつたが、三つ年上の兄が肺がんで入院していたのだが、取り敢えず退院したので、様子を見に帰つたのだつた。

黒い川面に目を落としながら、遙は身勝手な考えを打ち消すように、実家への道を歩きはじめた。何時に着くとも知らせていないので、さぞびっくりするだろうと思ひながら、遙は実家の門口に立つた。父や母が生きていた頃は、まつしづらに玄関の格子戸を開けて家中に入つて行つた。けれども今は、一瞬の躊躇いを感じるのだつた。自分のこのわだかまりは遙自身、何故なのか十分分かつてゐる。けれど、口に出して、他人に説明出来ない、どうしようもない遙の感情なのだ。商売が順調な時に、兄が建てた以前の家より、随分こじんまりした二世帯住宅の家屋。サラリーマンの甥がローンを組んで建てた家を、自分の実家とは呼べない、よそよそしさを感じないではいられないのだつた。

父が建てた家は、何の飾り気もない切妻屋根の粗末な二階家であら家だつた。本家の跡取り、長男が、戦争から帰つて來たので嫁を娶り、後見人だつた父が分家して建てたのだつた。

遙は玄関のインターほんを押そうとして、ふつと手が止まつた。一心に小さな十字架を前に、ロザリオを繰つてゐる母が、瞼の奥に浮かび、そこに重なつて、寝間で布団に腹ばいになりながら、始終本を讀んでゐる父の顔が映し出された。懐かしさが込み上げて、古ぼけた格子の引き戸のつもりで、指先で開けようとする、玄関が突然中から開いた。

「おー！お前、來たか」

兄の人一倍大きな声が被さつてきつた。

「うん。來た。突然でたまげたろ」

遙はいたずらを見つけられたように照れくさく、笑つて答えた。

「知らせてくんれば、駅まで迎えに行つたのに」

「ありがとう。ぶらぶら來てみたかったから」

遙はこうして人が驚いてくれるのが満更悪い気がしないつだつた。黙つて尋ねる醍醐味なのだ。後ろから嫂も、外側にくの字に曲がつた両の膝を、痛そうに手で庇いながら、

「おめえさんかね」

と遙を見て口元をほころばせた。

「うちなんか、この頃、誰も訪ねて来らんねえからさ、誰かと思ったこで」「

嫂は幾分卑屈なニュアンスを込めた物言いだつた。兄は

「はるが来たんね、また一杯飲むか」

と笑つた。この家は昔から何かにかこつけてよく飲む。嫂は

「また、おめえさんはそんげなこと言つて！病気のことも考えて！」

兄は何年も前から、糖尿病を患つてゐる。今では、毎日血糖値をはかり、インスリンを打つてゐるのだ。

「そんげのこと心配して、一年長生きしたからつてどうつてことないさ」

と半ば捨て鉢な気持ちを露わにして言い放つた。兄の心の内が判る遙は気安く合図地はうてなかつた。息子夫婦と日常生活が余りしつくりいつていないので、倒産の憂き目にあつて、何かの拍子にそれが口に出る。一年前から、息子は中国へ単身赴任になり、何が原因なのか、年寄のことを疎んじて、顧みようともしない嫁に、憤懣やるかたないのだ。年老いて頼れる肉親が、傍にいらない寂しさは理解出来る。だからといって、甥夫婦の悪口をまくし立てるわけにはいかなかつた。兄もそんなものを吹つ切るように

「ま、何でもいいから、一杯飲むべえ、おい、ビール冷えてねえか」

と嫂に冷蔵庫を覗かせた。そして声をひそめて、遙に

「のりも呼ぼうか？」

と言つた。昔からこの家では名前の半分でしか呼ばない。後ろは省略された。紀雄は遙の三歳年上の兄だつた。

「だつて、具合、どうなのよ」

「ま、ちつとくらい、いいんでないの」

のんぺえの論理はどこまでもルーズだつた。

兄はリビングの部屋に行つて電話を架けて戻つて來た。

「来るつて？」

「おお、ちつと來るつて」

「ほんと大丈夫かね」

と遙は首を傾げた。肺がんで放射線治療をうけてゐるのに、気懸りではないだろうか。

そんな心配をよそに、実家とは地続きの隣に住んでいる紀雄が、チャイムを鳴らしておばんです、と言つて入つて來た。空いている襖を少し開いて顔を覗かせたが、やはり顔色は青白い。

「おお！おめえ、何時來たんだや」

遙と目が合うと、それでもにこやかな顔を作つて言つた。

「一時間前くらいかな。体、なじなの？」

「うん、まあ、今のところはな」

そう言いながら、遙が座布団を敷いた場所に胡坐をかいて座つた。兄は

「ま、一杯やろんや」

紀雄がコップを持つのもどかしそうに、ビール瓶を前に突き出している。兄弟で飲めるのが殊の外うれしいのだろうと、遙は怒る氣にもならない。昔は飲みだすと際限も

なく飲んでしまうので、一ヶ月の酒代も相当なものだつたろう。さすがに今は年齢も年齢なので、量もそう飲まれなくなつてしまつたが、それぞれ病気もちなのに断酒できないでいる。

「酒止めて、一年長生きしたからつて、どうつてことないさ。それよか、生きているうち楽しんだ方がいいよ」

とうそぶいた。遥もその口だつた。遥は娘を帝王切開で生んだ時、輸血をしたのが原因でC型肝炎になつた。職場での定期健診で指摘されてから、十年以上も治療を受けてみたが、一向に数値はさがらず、病院にかかる時間が半端でなく、肝がん、肝硬変になつたら、その時は、その時だなどと啖呵をきるごとく病院通いをやめてしまつて。歳をとつて、だんだん女性の平均寿命に近づいて来ると、ウイルスを抱えていても、この年齢まで生きられたのだから、治療を続けなかつた後ろめたさはなくなつて。そして毎晩、酒を忘れないで飲むのだつた。若い時のようにめちや飲みはしなくなつたが、休肝日はないのだった。腹を割つて何でも話し合える友達ももたないから、一人、飲みながら自問自答をするのが、習性になつてしまつた。若い頃は、職場の同僚などに、誰彼かまわず、電話をかけたり、飲みに誘つたりしていたが、相手が本心で付き合つてくれているのか、迷惑と思つていながら仕方なく付き合つてくれているのか分からず、次第にそれが面倒に思えて家で一人飲むようになつたのだつた。

兄弟とは何のわだかりもなく気が許せるのだ。世間では、兄弟でも仲が悪い人もいるらしいが、遥たちは、取り立てて仲が良いわけではなかつたが、喧嘩をするでもなかつた。ただ、遥の夫が、会社を倒産させた時、五年間位、距離を置くようになり、付合いがなかつた。けれども、父が亡くなつたり、母が亡くなつて、いつとはなしにまた行き来するようになつていて。

「ほんに、ぜんがのうて、困つたもんだて」

兄は心底逼迫した声を出した。近くにスーパーの大型店が出店するようになつてから、売上がさつぱり伸びなくなつた。借金が膨らむばかりで、店を閉店する、すると言ひながら、ずるずると引き伸ばしていた。結局どうにも立ち行かなくなつて一年前に倒産してしまつたのだ。

父が生前、百姓は田圃を売つてはならんのだと、事ある事に言い、自分は田んぼを一反、一反と買い足して増やした父だつたが、兄は借金を清算する為、それを全部売つたのだった。

「どつかに、金でも落つこちていなかのー」

兄はまるで祈るような声を出した。遥はふと思ひ出して

「昔、家の近所に一億円捨ててあつたんだよ、竹やぶに」とおどけて言つた。

「えつ！ほんとか」

「そう。ほんと。宝くじが当たるとかさ」

遥はあぶくのようになつた金など、後々碌なことがないと思う。そう思ひながら、腹の中で

喉から手が出るよう、自分もお金が欲しいと思わないではいられなかつた。じいちゃんが生きていたら、すつかりなくなつてしまつた田圃のことを、どう言うだらうか聞いてみ

たいと思つた。生きる為にはしようがないと言うだろうか。兄を責める氣は微塵もないが、自分にものしかかつてゐる生活の苦しさを思うと、どうしても問いただしてみたい気になる。どんなに貧乏しても、心の貧乏だけは、するんじやないぞとも言つていた。父の言葉を思い出しながら、今の自分は心が卑しくなつてゐると遥は思つた。

父が家長としての実権を兄に渡してしまつた後だつたが、ある夏、遥が里帰りして、我が家に帰る時、「俺はもう金が自由にならんから、これを持っていけ」と床の間にあがつていた親戚からの中元の砂糖を紙袋に押し込んで持たせてくれた父の顔が俄かにクローズアップした。親として情けないと思つたのか、寂しげな父の顔が、遥は時々思い出す。

「じいちゃんて、結局どういう人だつたんだ」

と遥はビールを口に運びながら二人の顔を見比べた。兄は即座に

「いやあ、ほんに豪氣の人だつたなあ」

と言つてビールをぐくりと音をたてて飲んだ。

「もつと計算高く生きれば、あれだけ貧乏して、苦労しなくてすんだんじやないの」

遥は、現在の本家が、直系の人が繼いでいることを思うと、割り切れなさを覚えるの

だつた。

「それが出来るような親父だつたら、あれだけの人望は集まらなかつたろうよ」

軽い咳をして紀雄が言つた。

昭和十一年の冬、火事を出したらしい。父の長兄が焼け死に、その子供四人を後見人として育てあげた。その長男が戦争から帰つて来て、嫁をとると、自分は。三反余りの田んぼをもらつて分家したのだつた。火事の年に分家する筈だつたのが、長兄の死で思わぬ苦労が被さつて來たのだつた。母が「山だけでも、もらつておけばよかつたのに」と、自分たちの苦労の割には、僅かな見返りに、母は憤懣やるかたなかつたのだろう。それ位当然のことだと事あるごとに愚痴つていたのを、遥は忘れられない。父の才覚で買った山らしいのだが、それすらも本家を繼いだ甥に言い出さず、水飲み百姓に甘んじたのだ。

「親戚の人も、何も助言してくれなかつたのか

ねえ。おじさん、おばさんが大勢いるのに」

「一言もなかつたらしいな」

兄は以外とあつさり言つた。恨みも辛みも何にもない声音だつた。母がキリスト教に入信したのは、こんな葛藤からかも知れないと遥は思つた。

母が猫いらずを飲んで自殺をはかつたことがあると、姉が言つていたことがあつた。兄達も知つてゐることだらうか。

「ばあちゃんが猫いらずを飲んだつて、知つて  
る？」

「おおつ！」

二人は同時に声を上げた。

「親父も本家を守る為に必死で、自分のかあちんのことなんか、思つてやるゆとりがなかつたんだろ」

「それで教会へ行き始めたのかね、ばあちゃん」

「おそらく、そうだらうな」

紀雄がコップをテーブルに置きながら伏し目がちに言つた。

「その頃、また悪いことに、たけの目が見えないんじやないかということが判つて、それどころじやなくなつたのさ」

兄は払つても、払つても、降りかかる

困難を呆れたように言つた。

「階段の上から、一番下までころげ落ちたんだって、ねえちゃんが言つてた。」

「うん、それで目を確かめたら、どうも目が見えないんだということになつて、病院へ行つたんだ。」

全く視力がないわけではなかつたらしい。

「だけど、あいつ、歌が上手かつたなあ！佐渡おけきなんか、そこらの民謡歌手よりすぐつた！」

と兄は感心していた。遙は、いつも自分の後ろを、遙のお下がりのぶかぶかの長靴を履いて、はるやーぽんぽん、と歌いながらついてきた竹秋の声が耳元に甦ってきた。

「そして、ほんとに氣のいい子だつたつて、姉ちゃんが言つてたよ」

「お宮の縁の下に寝ていた小林幸三つていう男な」

そこで三人は声をたてて笑つた。髭もじやらのその男の風貌を思い出していた。  
「姉ちゃんの上に男と女二人生まれて、一歳にならないうちに死んじまつて、親はたけと三人も子を失つてせつなかつたろう」

六年前に娘を亡くした兄は、声を詰まらせて言つた。遙は上の二人のことは、話に聞いていただけで、全然知らないが、竹秋が死んだとき、紀雄が学芸会の練習で学校に残つていた遙を迎えて、皆の前で号泣したのを覚えていた。  
「ほんとに可愛い子だつたねえ」

遙は今も竹秋が生きていれば、その思いだけが心の中を駆け巡つた。姉、兄二人が死んでしまえば、自分が残されるのだ。そのことを思うと、居ても立つても居られない。

「死ぬ順番なんて、こうみんな年をとつてくると、誰が先なんて分からないけど、年の順なら、私が一番最後まで残つて、嫌だなあ」

遙は悲痛な思いだつた。肺がんを患つてゐる紀雄を前に死ぬことを話題にしてゐるのを、紀雄はどんな気持ちで受け止めているのかと、遙は思い及ばないではではなかつたが、一人残される寂しさを思うと、口に出さないではいられなかつた。

「人間、一度は死ぬんだと思っても、『人になるのは堪らない』

「それもどうしようば、仕方ないさ」

兄は、珍しく、嫂の皿に、マグロの刺身を載せてやりながら、

「いっぱい食べれや、いつもはこんな贅沢できんのだから」

少し口を歪めて言う表情に、何とも言えない侘しさが漂つていた。口に出して倒産したことがあからさまに嘆くわけではなかつたが、苦悩は自ずと表情にしみ出てくるのだから。年老いてから人生の辛酸を舐めるのは、名状しがたい哀れさを誘う。遙は胸に寄せ

てくる物悲しさを吹つ切るように、ビールを煽つて素知らぬ振りをきめこんだ。紀雄もそれを潮にテーブルの端に手をついて立ち上がる

「いやー、ごつおになった！俺も帰つて休むや」

「疲れたろ？」

遙はまだ別れがたかつたが、時々出る咳に、何とも言えない慄きを感じて、もう少し飲もうとは、言い出せなかつた。

「お前、何時帰る？」

「明日。姉ちゃんを見舞つてから帰るさ」

「そうか。いつまた会えるか分からんけど、お互い元氣でいろよ」

「そうだね。体だけは元氣なんだけど。全くいろんなことがあつてさ」

そこまで言つて遙ははつとした。病気の人にはらぬ心配をかけようとしている身勝手さに

慌ててしまつた。昔は、何でもかんでも、腹に溜めておくことが出来なくて、あけすけに他人にぶちまけていたのが恥ずかしく思うようになつてゐる。はたして紀雄は遙の顔に目を止めたが、すぐにそらした。今更、互いの家庭のあれこれをおもんばかりても仕方のないことだつた。兄の家のいざこざも、本人が話す分は聞いてあげられるけれど、解決策まで相談に乗れるわけはなかつた。

「ま、死ぬまで、元氣にしていようよ」

そう言つて笑つた。そして兄に杓子定規に挨拶し、嫂、ごつおになつたれ、と膝が思うように動かせなくて、まごまごしている義姉に掠れた声をかけて帰つて行つた。

一瞬空気が薄くなつたような、息苦しさをおぼえた。どんな別れでも感じる寂しさに浅いも深いもなかつた。今の今はもつと一緒に過ごしたかった。

「紀も長くないよ。息子の話だとあと一年位だつて話だ」

兄は、ガックリ声を落として呟いた。その話は、電話の度に聞かされている。遙はその都度、覚悟はしていると答えるのだが、同じ男同士として、兄はもつとやるかたない思いにかられるのだろう。

「だけど、俺たち兄弟は仲良しで良かつたなあ」

本当に表だつて争い事はしてこなかつたと遙は思い返した。遙の夫が倒産した時、借金取りから逃れる為に、実家に身をよせた遙に、嫂は皮肉の一つも言うわけもなく、着の身着のままで帰つてきた義妹に、下着や衣料品を取り寄せてくれたのだった。紀雄の家族も、姉の家族も、いろいろ気遣つてくれたのだった。

残つた三人で、ビールを飲みながら、刺身が余るから食え、食えと、互いに勧めながら口に押し込むようにして食べている。その内、また兄は、

「のりも、あと一年ぐらいかも知れないつてさ」

と同じことを言ひだした。遙は、さつき言つたでしょ、とのど元まで、出かかつたが、もう酔つたのかと思い顔色を窺つた。まだ膚色は普通で赤くはなつていない。兄も、嫂のことを「かかあも、この頃、ほんとにもうぐれて、もうぐれて」と認知症の嫂を嘆くのだが、自分も遙に電話をして来る度、同じ話を繰り返すのだった。その話は聞いたと、にべもなく言うのも悪いような気がして、ふん、ふん、と聞いているのだが、兄も少し、もうぐれて来たんじやないかと、電話を切つたあとで、首を傾げてしまふ遙なのだった。嫂も

腹がくちくなつたとみえて箸が進まなくなつてゐる。遙はビールをぐつと開けて、

「そろつと、お開きにする？」

「まだ、早いぞ」

兄は、昔から飲みだすと際限がない。というよりは、今の雰囲気を終わらせたくないといふのか、何時までも続けていたいのだった。どこかさみしがり屋なのかも知れない。嫂は不自由の体で、汚れた皿や小鉢をお盆に集めて、キツチンに運ぼうとしている。遙は危なつかしくて、

「ねえさん、私がやるから、座わつていてよ」

「ありがとう。ほんね、体が思うようにいかなくて」

自分でも情けなさそうな声で言つた。遙とは三つしか歳が違わないのだが、漸く年上に見える。遙は、義姉さんも、私とは違つた苦労を重ねてきたんだなあと、しみじみ思うのだった。遙は手早く皿などを洗い終えて座敷に戻つた。遙は遙で、まだ何となく物足りなさが残つてゐる。かなりビールを飲んだ筈なのにさっぱり酔いが回つてない。早く片付けて、日本酒をロックで飲もうと企んでいた。何時も家でやつてゐるスタイルだつた。実家とはいえ、こんな勝手をする自分が、我儘ものだなあと思はないではないが、兄達なら許してくれるという、甘えがあつた。座敷にゆくと、何時の間にか兄と嫂で布団を敷いてくれていた。

「わあ！布団敷いてくれたの。自分でやつたのに」

「恐縮しながら、それでも図々しく

「日本酒、飲んでいいかな」

と、声だけは遠慮深げにひそめて言つた。  
「おーいいよ。飲めるだけ、飲めや」

兄はそう言つて、自分たちの部屋へ入つて行つた。遙は片寄せられたテーブルに寄りかかりながら、酒を口に含んだ。苦味が口中いっぱいに広がつた。これで酔えるかなと思ひながら、故郷は遠くにありて思うものというけれど、帰つてきて、その懷に抱かれると、胸がじーんと打ち震え続けるものだと実感するのだった。グラスの中の透明な液体に、じつと目を据えると、光の反射で、花が咲いたように、キラキラと輝いた。あ、きれいと声に出かかると同時に、母の顔が滲んだ。庭や畑にいつも花をいっぱい咲かせた母。中でも夏の赤いサルビアは遙を惹きつけた。高校生の頃、「サルビアの幻想」と題して掌編を書いた覚えがある。どんな筋だったか、もうとうに忘れてしまつたが、目の悪い弟の竹秋が主人公だつたような気がする。

色々な花がクルクル風車のように回つて、酔つたなど遙は感じた。これで眠りにつけると思いながら、手が知らず、知らずグラスを口元に持つて行く。自分がから呆れてしまうが、酒を口に含むと、何とも言えない恍惚をおぼえてしまう。酒なんか、決して好きじゃないんだ、と言い訳がましく否定してみても、他人はそう見ない。遙は心の片隅に、根付いている哀しみを紛らわせる為に飲んでいるだけなのだ、と思つてゐる。がそう思いながら、微かな後ろめたさを覚えるのは何故だろう。そうしてまたグラスを口に運んで、田舎に住んでいた頃が、今まで生きてきた中で一番幸わせだったのだなあと思い返した。れんげの花咲く田んぼの真ん中で、大の字に寝ころび、雲の行方を追つた日。学校帰りに、農道で四葉のクローバーを探した小学生の頃。同じ歳の従妹や、近所の友達と、あの村の真

ん中を流れる川で、泳ぎまくつて遊び呆けた夏の日。同じ夏の日には、父がよく遙をその川に投げ込んだ。「お前の強情ぱりを直してやる」と言いながら。だがその川は、秋になると刈り取つた稻をはざかけするのに、舟で運ぶ川でもあつた。秋の川の水は澄んで、凄烈な水の流れに揺れて、河骨が咲いていたのだった。そんな思い出の中で、風花の散る三月のある日だった。優しかった親戚のお姉さんが、自ら命を絶つた知らせに号泣した。打ち震えるような悲しみを知つたのは中学生になつた頃だった。人生というものをまるで分つていなかつたのに、その頃から、なんとなく気持ちに気怠さを感じるようになつたのも事実だった。

遙は少し酔いの回つてきた目に、酒のグラスを見据えた。まだ半分は残つてゐるのを、もやつた頭に映しながら、だるくなつた体が自然に布団の方に向いてしまつた。寝転んでそのまま次の朝まで、目を覚まさなかつた。

起き掛けにダイニングの方に耳をすましたが兄たちが、起きている気配は感じられなかつた。遙はそつとトイレに立ち、部屋に戻つて来ると、帰る用意を始めた。突然、遙が顔を出したら、姉はどんなに驚くだろう、とその驚きの顔を想像すると、胸が小躍りする。

そのうち、兄と嫂の話す声がして、遙もおはようございます、と挨拶をかけながら、ダイニングのテーブルについた。

昨日の残り物のおかずには、新しいみそ汁で朝食をすますと、遙は思ひたつて仏壇に参つた。いつもなら、顔を洗うと真つ先に手を合わせる遙だったが、今朝はまだ頭が酔いどれているのだろうか。手を合わせてそれらのことを詫びながら、父と母をしのんだ。その時、兄がすぐ後に立つて

「何時に帰るや」

と言つた。

「何時の電車があるかね」

「新幹線か」

「いや、普通で行く」

そんなやり取りの後、ローカル線の駅まで送つてもらつた。町はすっかり寂れて、活気は消え失せている。駅舎はほとんど変わっていなかつたので、遙は何故かぐつと胸が詰まつた。高校を卒業して、就職のためにこの駅から汽車に乗つたのだった。あの時、見送りに来た母が、涙をそつと着物の袖で拭いていたのを思い出した。感情表現の下手な母は遙に涙など見せたことなかつたのだ。父も都会に出ることを反対したのだったが、遙は、何に駆られて故郷を後にしたのだろう。人生のわりきれなさを、嫌というほど味わう羽目になるというのに、何も考なかつたのだ。駅舎の前で車を止めると。兄は

「また帰つて来いや」

「うん。ありがとう。先立つものが貯まつたらね」

そこで二人は顔を見合させて笑つた。兄弟四人の内、人生終わり近くなつて、二人の暮らし向きは暗闇を彷徨うように逼迫してしまつてゐる。それを口に出して嘆くわけにもいかず、他人を呪つてみても仕様がないから、自分の馬鹿さ加減を苦笑いで誤魔化すしかないのだった。

「俺も、そのうち顔見にゆくからつてー」

「うん、姉ちゃんに伝えておくわ」

姉も兄を待つて いるだろ うと思つた。脚も不自由になつてから、暫く見舞いに行つてい  
ないらしかつた。突然、遙はそこで、あの川の佇まいをもう一度目に映して来なかつたこ  
とに気がついた。あれだけ竹が生きていてくれればーと願つていたのに。最近遙は、最後  
の瞬間になると、何時も頭から大事なことが抜け落ちてしまう。ああ一年をとつてしまつ  
たのだと、しみじみ胸の底から、その思いが湧き上がつてきた。

竹秋のはるやーぽんぽんの声が耳元でかすかに木靈した。遙の体ごとあの川の畔に引き  
戻すような竹秋の声だつた。

二〇一七年六月